

# ヴィットーレ・カルパッチョ研究 「スラヴ人会」 連作を中心に

著者	森田 優子
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第338号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59358">http://hdl.handle.net/10097/59358</a>

もり た ゆう こ  
森 田 優 子

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 338 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 歴史科学専攻
学 位 論 文 題 目	ヴィットーレ・カルパッチョ研究 ー「スラヴ人会」連作を中心にー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 尾 崎 彰 宏      教 授 泉      武 夫 教 授 長 岡 龍 作 准教授 芳 賀 京 子 准教授 今 井      勉

## 論 文 内 容 の 要 旨

ヴィットーレ・カルパッチョ(一四六〇年頃～一五二七年頃)は、主にヴェネツィアを活動拠点とし、さまざまなジャンルの絵画を制作した画家である。ヴェネツィア美術というと、ジョルジョーネやティツィアーノといった、ヴェネツィアの盛期ルネサンス美術の画家に注目が集まるが、カルパッチョは定期的にみると彼ら以前にヴェネツィアで活躍した画家である。カルパッチョは政府による公的な大規模絵画装飾に携わり、ヴェネツィアの互助組織のためにも物語画の連作を制作した。さらに、ヴェネツィアの貴顕による依頼で、肖像画や家具装飾にいたるまで、さまざまなジャンルの絵画を制作した。

こうしたカルパッチョの作品について、今日まで膨大な数とは言えないが途切れることなく研究は重ねられてきた。カルパッチョ研究は一九世紀末頃から本格的に始められたが、その後の研究のなかには単に過去の研究の繰り返しとなっているものも多い。カルパッチョの連作に関連する史料は、一九六〇年代に一部出版されているが、それを用いて作品の理解に踏み込んだ研究はなかなか行われてこなかった。史料読解を踏まえ、当時のヴェネツィアの社会的文脈において作品を捉える研究が行われるようになったのは、近年のことである。なかでも、注目すべきは一九八八年に出版された、パトリシア・フォルティニ＝ブラウンの研究書『カルパッチョの時代のヴェネツィア物語画』(Fortini Brown, Patricia, *Venetian Narrative Painting in the Age of Carpaccio*, New Haven 1988) である。この研究は、カルパッチョだけを論じた画家の個別研究ではないが、社会的文脈を踏まえながら当時のヴェネツィアの物語画／歴史画を広範に論じている。フォルティニ＝ブラウンの研究は、それまで個別の画家研究に留まる傾

向にあった研究において、物語画連作というジャンルを総体的に論じ、画家カルパッチョ、ジェンティーレ・ベッリーニ、さらにはラッザーロ・バステアーニ、ジョヴァンニ・マンズエーティといった論じられる機会の少ない画家とともに考察した。そしてジョルジョーネやティツィアーノ以前のヴェネツィア美術についての新たなパースペクティブを提示している。

さらに、一九九六年に出版されたアウグスト・ジェンティーリによる研究書『カルパッチョの物語画、ヴェネツィア、トルコ人、ユダヤ人』(Gentile, Augusto, *Le Storie di Carpaccio, Venezia, i Turchi, gli Ebrei*, Venezia 1996) は、カルパッチョ研究において新たな展開をもたらしている。ジェンティーリはヴェネツィアの各古文書館に保管されている史料を渉猟し、当時のヴェネツィア社会を具に考察することで、新たな作品解釈を加えている。

本稿はカルパッチョの描いた「スラヴ人会」連作の全体像を明らかにするため、各作品に沿って論をすすめた。中心的なテーマとした「スラヴ人会」連作は、小組合の「スラヴ人会」の依頼で制作された九点のキャンバス画による連作である。ヴェネツィアでは一三世紀初頭には小組合という組織が作られていたことが確認されており、絹織物業、靴職人、家具職人の集まりといった同業者組合も存在した。もともと小組合は信仰をベースとした、居住区の住民同士の隣組的な相互扶助の組織であったが、各組合は居住する地区を越えて入会可能だったため、隣組としての役割は徐々に薄れていく。会によっては同業者組合として設立されたのではないものの、同じ業種の人物が集まる組合もあったという。また鞭打ち修行者の会は一四世紀後半になってヴェネツィアで設立され始め、のちにこの鞭打ち修行者の会が大組合と呼ばれるようになる。大組合は会員数五、六百人を擁し、一五世紀のヴェネツィアには四つの大組合が存在した。慈愛の聖母マリア大組合、聖ロクス大組合、聖マルコ大組合、福音書記者聖ヨハネ大組合、その後一六世紀に入って二つの組合——聖テオドルス大組合と慈悲の聖母マリア大組合——が大組合として認定され、計六つの大組合が存在したことになる。

こうした大組合ではそれぞれに会館を構え、彫刻や絵画で建物内に装飾をほどこした。一四二〇年頃には福音書記者聖ヨハネ大組合のためにヤコポ・ベッリーニ(一四〇〇頃～一四七〇年)が描いた旧約・新約聖書を主題とした物語連作がある。福音書記者聖ヨハネ大組合は積極的に会館の装飾を計画し、一四九四年頃から聖十字架伝の連作が制作された。カルパッチョはこの絵画連作に参加している。こうした大組合以外に、小組合の会館においても、絵画連作で会館の壁を飾る装飾がすでに行われていた。カルパッチョは聖ウルスラ伝連作、聖ステファヌス伝、アルバニア人会連作など、こうした小組合のための絵画連作を精力的に手がけ、聖ウルスラ伝連作は会館を飾る大規模絵画連作の嚆矢となったと言われる。

本稿で論ずる「スラヴ人会」連作は、小組合の会館を飾るために依頼された絵画装飾である。この「スラヴ人会」は、その名の通りスラヴ人による組合であるのだが、こうした出身地による会は、当時の文章によると、「郷土会 schola di nation」と呼ばれていた。こうした郷土会は「スラヴ人会」のほかにも存在した。トスカーナ地方の都市ルッカの出身者による会、ミラノ人会、そのほかイタリア半島の外から移住してきた人々によって組合が作られていった。そうした組合には、ギリシア人会、アルバニア人会、スラヴ人会などが存在する。当時のヴェネツィアは生粋のヴェネツィア人だけでなく、さまざまな人種が行き交う、人種の坩堝であった。ヴェネツィアが商業上の一大中心地であったこともその理由だが、一五世紀には別の要因で人口の流入が起こった。トルコの武力的脅威がヴェネツィア植民市に直接及ぶようになったことが要因である。ヴェネツィアは、第四次十字軍を重要な契機として、様々な機会にアドリア海沿岸の軍事上の要所を領地としてきたが、一五世紀後期にはそうした場所にトルコが発作的に侵入・掠奪を繰り返すようになった。スラヴ人は、そのトルコの脅威やそれによってもたらされた貧困によって、ヴェネツィアに移住してきたと言われる。移住してきたギリシア人の場合は、組合を設

立するにあたって宗教上の問題が障害であった。彼らの信仰がローマ・カトリックではなく正教だということが、組合を持つための最大の難関となった。ヴェネツィア共和国はその対処にかなり難儀したことが伺える。最終的にギリシア人会の設立が許可されたのは一五世紀末だった。しかし、「スラヴ人会」の場合、ヴェネツィア領であった土地からの移住者もかなりいたと推測され、スクオーラ創設にいたる障害は、それほどなかっただろうと予想できる。「スラヴ人会」の会員の多くは船乗りであり、地理上の理由から経済的、武力的な意味でも海の国であるヴェネツィアでは、航海技術の高いダルマチア人は重用されたと伝えられる。

第一部では、ゲオルギウス伝で表わされた、作品の背景表現に注目し論述をすすめた。画家は、当時出版されつつあった聖地巡礼案内書や年代記の挿絵に表わされた東方の建築や風俗を典拠とし、異国的なモチーフを作品に表わしたことはすでに指摘されている。本論では、そうした年代記等に、古代研究によって明らかにされ始めていた建築なども描かれていることに着目し、古代研究のネットワークを探ることで、これまで指摘されてこなかった、作品中の重要な建築の特定を行った。さらにこのモチーフの特定により、《聖ゲオルギウスと竜の闘い》における表現の意図が浮き彫りとなることを示した。ゲオルギウスと竜という物語の中心は、悪魔の象徴である竜を倒し異教徒を改宗させるというテーマである。「ゲオルギウスと竜の闘い」という主題が内包する、「キリスト教対異教」の構図を読み解き、その構造が「スラヴ人会」連作のゲオルギウス伝すべてに共通することを論じた。その論述により、ゲオルギウス伝の表現には、それまでの視覚的伝統のなかにおいても十字軍による聖地奪還が踏まえられており、とくに一六世紀初頭のヴェネツィアにおいては、オスマン帝国とキリスト教国の関係を象徴していることが示される。《聖ゲオルギウスと竜の闘い》という主題は、当時のヴェネツィアの人々にとってトルコの脅威に対するキリスト教国の防衛を意味していた。一四九九年にはトルコがバルカン半島を北上してフリウリ地方に侵入し、北イタリアに戦火が拡大するかと思われた時期である。この年トルコはイタリア半島に前進せずに撤退し、ヴェネツィアは当面の危機を免れた。こうした海陸両面からの侵攻は、ヴェネツィア人に深い恐怖心を与えたと言われる。宗教的にもトルコの侵攻に対するキリスト教国の防衛は喫緊の課題であり、とりわけトルコ領と地理的にも近いダルマチア地方はキリスト教国の防衛線だった。トルコの侵略によってキリスト教徒は沿岸部のヴェネツィア領や、アドリア海を横断し、南イタリアやマルケ地方に移住する人々もいた。「スラヴ人会」の会員はそうしてヴェネツィアに移住してきたのである。

「スラヴ人会」連作には、さらに「スラヴ人会」のパトロンたるヴェネツィア貴族パオロ・ヴァッラレッソの対トルコ戦における「武勲」が投影されている。このパオロ・ヴァッラレッソは一五〇二年に「スラヴ人会」に聖ゲオルギウスの聖遺物を寄贈した人物で、かれはペロポネソス半島の要塞でトルコと戦った際に、要塞の陥落間際にその地で譲り受けた聖遺物をヴェネツィアへ持ち帰った。その聖遺物を「スラヴ人会」へ寄贈した同年に絵画連作が開始されたと考えられる（作品に一五〇二年の記名がある）。実際には、パオロは要塞陥落の責任を問われ、裁判にかけられようとしていたのだが、上官の説明によって無罪となっている（この時、斬首された指揮官も存在した）。《聖ゲオルギウスと竜の闘い》は、こうしたパオロの無実表明と実際に戦ったみずからの行為を正当化する機能を果たしていたのではないか。さらにこの説に加えて、ゲオルギウスの主題が持つ「異教対キリスト教」という二つの世界の構造は、作品の構図にも及んでいることを指摘し、《聖ゲオルギウスと竜の闘い》における背景の表現でも対照的な場所——アンコーナとコンスタンティノポリス——を表わしていることを明らかにした。建造物の特定により、この二つの場所の対置的表現は、一四六四年に計画された（が未遂に終わった）教皇ピウス二世による十字軍計画の反映によるものと考えられる。この計画には、パオロ・ヴァッラレッソ

の叔父ジローラモ・ヴァッラレッソも参加予定であった。パオロの行動モデルであったと考えられる、おじの行動は、聖ゲオルギウス伝においてもパオロの姿同様、ゲオルギウスのエピソードに重ねられている。このように、本論第一部では表わされた建造物の特定を通じて、作品に込められた意図を浮き彫りにし、一六世紀ヴェネツィアの状況を解きほぐしながら、表現に暗示された依頼主と依頼主一族の姿を明らかにした。

第二部ではヒエロニムスとアウグスティヌス、二人の教父伝のエピソードを扱った。「スラヴ人会」連作には、《聖ヒエロニムスとライオン》、《聖ヒエロニムスの葬儀》と《聖アウグスティヌスの幻視》が描かれている。後者の二つはヒエロニムスが逝去する際の出来事である。「聖アウグスティヌスの幻視」という主題もヒエロニムスの奇跡を示したものであり、三作はヒエロニムス伝と捉えることができる。この主題が選択された意味を探るため、聖人伝の形成過程や、中世・ルネサンスにいたって、二人の教父がいかに捉えられてきたかを論述した。

また《聖アウグスティヌスの幻視》においては書斎兼礼拝堂という、珍しいセッティングが描かれており、こうした表現について当時の書斎についての認識や、描かれた表現を踏まえ、伝統的図像から逸脱した箇所があることを指摘した。それは描かれた部屋の細部に見られる、美術品やメダルの蒐集である。こうした表現は、十六世紀中ごろになると蒐集家の肖像や学者の肖像に見られるものだが、カルパッチョによる表現はそのごく初期の例である。後にはブロンズ彫像やメダル蒐集の表現が絵画において流行し一般的となったため、カルパッチョの作品もそうした流行による、当時の風俗の描写であると安易に捉えられる傾向にある。だが、カルパッチョの描いた書斎は聖人の書斎であり、そのセッティングはアウグスティヌスの属性を示すもの、さらに個人を特定していると考えられる細部が混在している。

「スラヴ人会」とヴァッラレッソ家の関係を考慮すると、連作中のゲオルギウス伝において、ゲオルギウスに武人パオロ・ヴァッラレッソの姿が投影されたように、件の書斎には人文主義者として高名であったザダルの大司教マッフェオが重ねられている。このアウグスティヌス伝については、ヴァッラレッソ家と画家によって主題が選択され、描かれたと考えられる。ヒエロニムスによって啓示をうけるアウグスティヌスには、ダルマチアにおいて司牧に務めたマッフェオ・ヴァッラレッソの姿が重ねられている。とすると、「スラヴ人会」側からすると、ヒエロニムスは同じく郷土の教区において長年の勤めを果たしたマッフェオによっても称えられることとなる。つまりヒエロニムスを称賛する文脈において「聖アウグスティヌスの幻視」が捉えられたと考えられる。

第三部、第一章においては、キリスト伝の主題や構図、表現の根本にある宗教的思想を明らかにし、「スラヴ人会」連作の再構成を試みた。カルパッチョの描いた《オリーブ山でのキリストの祈り》と《マタイの召命》は、「スラヴ人会」会館の改築により、元来飾られていた場所とは異なるように飾られていると考えられる。この場所変更のため、元来この二枚が果たしていた機能が現在は見え難くなっている。よって、作品の機能を論じるため、主題や構図について論じ、当時の北イタリアにおいて「キリストのまねび」の宗教的思想と表現において相関関係があったことを説明した。その説明の過程で、当時出版された宗教書を添えられた木版画とともに論じ、内容と視覚的表現の関連性を指摘した。当時出版された『キリストに倣いて（イミタティオ・クリスティ）』に添えられた木版挿絵に注目し、そこで表わされた表現と「キリストのまねび」の思想の関係を論ずることで、カルパッチョの作品にも「キリストのまねび」に基づく宗教的思想が認められることを論述した。キリスト伝の「オリーブ山でのキリストの祈り」の、カルパッチョに先行する作例を通覧することで、同主題における表現が、機能として祭壇に関連することを明らかにした。さらには、二枚のキリスト伝の構図により、二枚が祭壇を挟んで両側に飾られていたことを仮説として提示した。「スラヴ人会」に残る史料から、カルパッチョの連作は

会館の一階（地上階）か二階のどちらかにまとめて飾られてはいなかったと考えられており、このキリスト伝再構成は史料的にも矛盾しない。

二章では、「スラヴ人会」会員の出身やほかの移住者コミュニティの問題にも言及し、「スラヴ人会」連作の表現は、会員の多様性が呼応していないことを論じた。スラヴ人会の会員たちは、アドリア海沿岸のダルマチア地方諸都市、ザーラ、シベニク、スプリト、ドゥヴロブニク、コトルなど様々な地域から移住してきた。こうした地域ではキリスト教といっても、住民がすべてローマ・カトリックではなかった。とくに南バルカンに地理的に近づくにつれ正教の信仰が根強く、コトルがヴェネツィア領となつてからは、数百名単位で正教徒をローマ・カトリックへ改宗させたという記録も残っている。また、ヴェネツィアにおける移住者コミュニティも、それぞれが独立していたのではなく、かなり近接していたと考えられる。アルバニア人会は一四四二年に設立され、一四五一年に設立される「スラヴ人会」に先んじること九年前から活動していた。そこにはいまだ自分たちの会をもたないスラヴ人が所属していたのではないか。それは一四五五年に、アルバニア人会とスラヴ人会両方に在籍することを禁ずる規定が定められたことから推測される。スラヴ人会には、その後も出身地から察すればアルバニア人会に所属するような人物が所属しており、遺言書などから判明する交友関係には、アルバニア人コミュニティとスラヴ人によるものが重なり合っていたことがわかる。そして、ギリシア人会はというと、一四九八年に設立され、教会の設立が許可されたのが一五一四年、教会が完成したのが一五七三年だった。そのため本格的な活動は一六世紀後半からとなった。一五世紀から一六世紀初頭にかけてのギリシア人コミュニティのあらましや、スラヴ人、アルバニア人の移住者との関係は記録にのこっていない。だが一六世紀中ごろの記録ではあるが、セルビア出身者やモンテネグロからの移住者が在籍していたことが示されており、互いのコミュニティの近接性を裏付けている。

「スラヴ人会」は、ローマ・カトリックを信仰する組合として設立されたとはいえ、会員たちの信仰は一樣ではなかったと想像される。その「スラヴ人会」会員にとってのアウグスティヌスとはいかなる聖人だったのか。正教においてアウグスティヌスは、一九世紀初頭まで聖人集に加えられていなかった。その歴史をたどると、正教にとってアウグスティヌスの存在が重要となるのは、「及び子」（フィリオケ問題と呼ばれる）が問題となる時である。

フィリオケ問題とは、聖霊がいかに発出したかという教義的内容と、ニカイア＝コンスタンティノポリス信条への「フィリオケ」の差し込みという信条への「追加」問題の二側面がある。三八一年のニカイア＝コンスタンティノポリス信条において、「聖霊は父から発出し、父と子と共に礼拝され、あがめられ」とあるとおり、正教会において聖霊は父のみから発出するとされるのに対して、ローマ・カトリック教会では、信条に「及び子 filioque」が差し込まれたことで「聖霊は父及び子から発出」と考えられるようになった。

この信条の「改竄」がいつどこで行われたのか明らかではない。だが六七五年に西方教会によって開かれたブラーガ地方会議において、ニカイア＝コンスタンティノポリス信条にはすでに「及び子」が差し挟まれていたという。

フィリオケ問題は東方教会の教義の根本的な性質や、信条に対する重要な認識に関わるために、東西教会統一の機運が高まったとき、常に論争の焦点となっている。ただ聖霊と父と子の三一論だけでなく、西方教会によって「及び子」がニカイア＝コンスタンティノポリス信条に書き加えられたことが両教会の合同を阻む問題だったと考えられている。この問題は一四三八年から三九年にかけて開かれた東西教会統一を目的としたフェッラーラ・フィレンツェ公会議においても噴出した。それまでに開かれた公会議では、本格的な議論は為されておらず、形式的に東西教会統一が宣言されてきたが、この公会議

では、七〇〇名以上のギリシア人が参加し、何カ月にも渡って議論が重ねられた。論証にもちいられたのは、主にギリシア語による文献だったが、一四三九年三月に三位一体について議論が始められた時、ラテン教父のなかで最も頻繁に引用されたのが、アウグスティヌスであったという。

《聖アウグスティヌスと幻視》という主題は、第二部で論述したように聖三位一体についての議論を含んでおり、「スラヴ人会」のように宗教的傾向が一定とは考えられず、地理的にも多様性のある集団においてはデリケートなものであっただろう。「スラヴ人会」の守護聖人たるトリフォニウスが連作において中心的に扱われず、「スラヴ人会」の守護聖人ではないアウグスティヌスのエピソードが前面にでている。ヒエロニムスはダルマチア地方ストルドンに生まれたと考えられており、スラヴ人をキリスト教化し、スラヴ典礼で用いられていた古代教会スラヴ語（グラゴル文字）を作ったと伝統的に考えられてきた（実際は聖キュリロスと聖メトディオスによってスラヴ人がキリスト教化され、キュリロスによってグラゴル文字が作られた）。《聖アウグスティヌスの幻視》がヒエロニムス伝に内包されるものとはいえ、大きなキャンバスの一枚をアウグスティヌスという聖人を描くために使用していることには、スラヴ人会を主な依頼主と考えるとするなら違和感がつきまとう。スラヴ人たちにとってアウグスティヌスは、ヒエロニムスを称える、なじみの薄い聖人であった。こうした「スラヴ人会」会員と絵画の主題にずれがあることから、絵画連作の核が依頼主ヴァツラレツォ家と画家の関係によって成り立っていると考えられる。

一五・一六世紀の物語画連作は、その多くが当初飾られていた場所から引き離されて、各地の美術館に散っていった。一方カルパッチョのスラヴ人会連作は、幸運にも当初飾られていたスラヴ人会に残された。このようにスラヴ人会の財産として、スラヴ人会と切り離せない存在であるにもかかわらず、作品自体を振り返ってみると「スラヴ人会のための、物語画連作」とは言い難い側面がある。画家カルパッチョとスラヴ人会連作についての一般的な見方からすれば、作品に見られる異国情緒は、「スラヴ人会」に向けた表現であると言われる。ただ当時のヴェネツィア美術の研究において、こうした異国的モチーフは一五世紀後期から一六世紀初頭の物語画における流行であったと説明される。そうした流行をカルパッチョが先導していたとはいえ、東方表現が特にスラヴ人会の鑑賞者に焦点を当てた表現だとは説明されない。また、そもそも描かれているのは会員の出身地であるダルマチアの風景ではなく、おもにエジプトやコンスタンティノポリス、イェルサレムといった街の風景、風俗である。描かれた主題を見ても、スラヴ人会の会員に宛てた表現であるといいきれない。ゲオルギウス伝のエピソードだけを見るなら、トルコの拡大によってヴェネツィアに移住してきたスラヴ人たちにとって、ゲオルギウスの物語に込められた対トルコの意図は意に沿うものだっただろう。しかしアウグスティヌスやキリスト伝はどうか。「アウグスティヌスの幻視」にかんして言えば、典拠は当時イタリアで流行していた主題であり、そもそも「三位一体の啓示」という議論を呼ぶ問題を含んでいる。またキリスト伝についても、当時の宗教的潮流に基づいたヴェネツィアの宗教画として語ることができる。スラヴ人会の会員たちに正教からの改宗者がいたかどうかは問うことができない。だがアウグスティヌスに馴染みのない会員がいる場において同聖人を表すよりも、状況的には「荒野の聖ヒエロニムス」という伝統的な主題が選択されることもあり得た。

もし連作の「依頼主」がスラヴ人会であり、会の役員らが画家との交渉にあたっていたと仮定するならば、スラヴ人会連作はこのように表現されただろうか。たとえば《聖トリフォニウスによる悪魔祓い》と《聖アウグスティヌスの幻視》を比較してみると、後者にたいする画家の力の入れようは明らかであり、守護聖人たるトリフォニウスのエピソードが重視されていないことがわかるだろう。ゲオルギウスとヒエロニムス、アウグスティヌスという連作の核には、ヴェネツィア貴族ヴァツラレツォ家が大きく関与しており、連作中に会員らしき人物が表わされていないのも、こうした理由によるものと考えられ

る。つまり「スラヴ人会」連作は、ヴェネツィア貴族ヴァッラレツォ家のパトロナージのもと、「スラヴ人会」会館の装飾という場を得て描かれた物語画である。「スラヴ人会」連作における依頼主ヴァッラレツォ家の存在が明らかになることで、ようやくカルパッチョの「東方表現」は、「スラヴ人会」との固い結び付きが緩められ、当時のヴェネツィア社会におけるトルコとヴェネツィアの状況認識の中で理解される。また、「聖アウグスティヌスの幻視」といった主題が「スラヴ人会」の依頼によって描かれた主題としては不自然であることをも説明し、カルパッチョの連作が「東方的」だと一般に称されるにもかかわらず、伝統的なヴェネツィア美術であるだけに「スラヴ人会」においては耳鳴りのような微かな雑音をたてていたのではないか。本稿はこうした論述によってカルパッチョの画業において代表的な「スラヴ人会」連作の成り立ちを明らかにし、ヴェネツィア社会におけるスラヴ人や、またダルマチア地方を中心に活動するヴェネツィア貴族たちが邂逅した場「スラヴ人会」において、表現が果たした機能を解き明かした。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、15世紀ヴェネツィアで活躍した画家ヴィットーレ・カルパッチョの畢生の大作「スラヴ人会」連作（全部で9枚の連作からなる）に表象されている歴史空間を浮かびあがらせようとする試みである。第1部「ゲオルギウスと聖地の表現」では、連作中の「聖ゲオルギウスと竜の闘い」を中心として取りあげ、とくにそこに描かれている背景に注目している。竜の背後にはコンスタンティノポリスにあるハギア・ソフィアが描かれている。この建物は、ロイヴィヒの版画からとられたものであり、ゲオルギウスが救出するカッパドキアの王女の背後には、アンコーナの教会が見える。両方の建物がゲオルギウスと竜に対応するかたちに配されている。この点に注目した論者は、ここにキリスト教との救済のために画策された1464年の十字軍への期待のあらわれと読みとっている。つまり、この十字軍計画は結局挫折したものの、その期待の大きさがこの絵にあらわれていると論者はいうのである。第2部では、第1部で論じられたゲオルギウス伝の対面に描かれたヒエロニムス伝、アウグスティヌス伝を中心、パトロンと考えられるヴァッラレツォ家との関係が検討されている。この部でとりわけ注目されるのは、《アウグスティヌスの幻視》に対する分析である。書斎兼礼拝堂が舞台となっているだけでなく、そこにはブロンズ彫刻メダルの蒐集品など一種のコレクション陳列室ともなっている珍しいセッティングに論者は注目し、描かれた場所が画家の一時の思いつきではなく、具体的なモデルがあったのではないかと考えた。そして、このアウグスティヌスの相貌に、ヴァッラレツォ家のマッフェオの肖像が重ねられているという斬新な説を呈示し、この「スラヴ人会」の連作が逸名の多数の人によって寄進されたものではなく、ヴァッラレツォ家の意向が強く反映されたものであることを明らかにした。第3部では、主題ごとに個別に検討した連作がどのような配置になっていたのかを解明しようとしている。その際、鍵となる作品が、《オリーブ山でのキリストの祈り》と《マタイの召命》の2点である。これらの作品が後世に行われた改修工事により当初とは異なった配置に置かれているのである。元来の配置について構図や機能に注目した。そしてとくにこれらの絵に「キリストのまねび」という宗教的な思想が表現されていることを突き止め、この連作の意義とその拡がりの大きさを別決している。

このような卓越した研究成果によって、本論文はこの分野での今後の指標となりうる示唆に富む研究とみなされ、本論文が斯学の発展に大きく寄与するものであることは疑いをいれない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。